大扶桑國考

上

ル 3
3067
1

大林未國序

大林未先生是詩集刻成分二卷
帝道惟一之皇謨
神道而其學
筆知水藏言
純得余同文

新安圖書

大扶桑國考序

大鋟平先生奉
帝道惟一之皇誥學顯幽分二之
神道而其器環朗其識英逸奎
筆如水著書如北議論拔山精
純淘金固不待隆明等之贊也

奄聽我
東叡山大王之奉覲而　眷顧有
年爲若夫古史及徵靈真柱等
數部注年既回豊田少進而獻
諸　府內
大王感賞特有恩賜邇者大扶桑
國考及三五本國考二部繕寫
己成使隆明復獻之
大王照覽數日從容謂隆明曰方
今古學大振俊士崛興然未嘗
聞有探彼外邦之載籍而明我
神州之典教者也今也乃有此

撰述。可謂足治末學之舊弊。為後進之木鐸矣。吾將更以一部。備於

傳洞乙夜之御覽焉。隆明謹而承慈旨。乃退以傳諸先生。先生率爾。且喜且泣曰。嗚呼。蜀蕘之談。庸

夫之愚。誠無徒棄焉。而久辱眷顧。更奉恩教。何奉加焉。與為我道。誌其教旨。以為之序。隆明唯唯。不敢以不敏辭焉。剖剔方成。於是乎筆此事。以冠其首云。

天保七丙申仲冬癸巳

東叡府臣　進藤隆明謹識

氣吹舍門人　脇田信親謹書

大扶桑國考序

高山ゝ登て見度(ワタシ)する事。人〻みな〻ろぐ〻て。國原海原おほ〻こゝ見放(ケ)て。ゑで其見度の佳(ヨキ)をみ〻愛ぜ。歌よみ文ほ〻ふ〻こゝ示ぶ。ゆゑ。又その嵩かゝこの島とゝゐやう見分(キ)さだゑて。遠き近きをも測りむこの陸ゆき海ゆく。ものゝ多げき拙もゝとゝる有已。

同じ見度とも。其見る人一の様ならでなんと
有りふれこと譬いふべきこと有るよりて先いふ
べしふ氣吹屋の平田吾兄識高く学博き。
其まはずらるかむ〻書。まさやる論書。
こらは巻こ皆人の見知きぬところなれど。
今さらに言挙せじ。然るそ乃考論奇
幽る域さぐ妙顕るぬきをめて。世人の

思慮の外に出る事ども多よりて。いやしゝ
いぶせ人を有とも。いで是を彼高山の見
度よるとへ言む。平田吾兄の見度ハ。普通乃
みるこふをいとゝ。そとよりきゝれる利眼
なるうへに選とえらこ。磨とみがける遠鏡をさへ
取こへ。天こは高峰の絶頂に立て。日経日緯。四
方八方遍く見さけ見ほ。潮の八百重乃

澳津島に向伏雲よさゝ原國におつる方はく
殘るくまなく見分き見さぐもえん其島まそ
何木生くるも波國ゆハ何人住よそそそ近く
かくくく遠くとまつぐくるまくやゝふ千里の
外を眼前に如ときもあく言さくくゝふくと
彼おほくくよ覩ふ人くそ近をさくく意とあぬよ
まくて遥く思もよくるバくもで驚のくして怪ぶ

免ぶ又くもやくゆ見そゝ原人くそぶゝ遠くを各こ
眼のきくみ見及はく其あほよくそぶりぐくを
測かむゝ知てあれバ今吾兄のさるべを寔ゆ
さも有べくおもむ計くふくもくもぐくりくもと
喜ぶくるぶゝ或ハ其さゝんさゝ彼方よ依て
此方を定むくもづきくとさつがれるはきくれよ
よりて大功績を賞感きあむくしぶ物くく

直眼（タヾメ）と遠鏡との間ゑ思ひまて。そ〳〵後（ノチ〳〵）ゑ
まさかしきぐ。鏡乃善悪をえらぶべ。とり
磨〳〵ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。知（ラ）ざて。ぐ。ぐ。ぐ。ゑ新奇（メヅラシ）き
方ゑ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。彼此（ヲチコチ）をさへ見ゑ。ぐ。
まぎ〳〵し。はて。ハ海ゆき陸ゆく本つ道をも。
ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。

樂しくそなぼゆるまゝに。板本なれるをさゝふを言ばまゝ稿本(シタガキ)まて全くぬをとゝ出見つゝのそれ利眼をゝふまゝに男子大き見とゝしたかゝをそのれふどゝやをとゝふに。妙度それの大扶桑國考板本(スリ一キ)よりふを序文(ハレブミ)をへよとゝむあをされゝるをゝかきあのを城。靈あをふ学の兄弟とかゞをよゝられる事のうれしきよ。拙きを思ゞをていそ此考は妙よ奇しく仰ぎ信(ヨル)べきよしなをはやある序文はくりてと。其詞おをゝ同らゝとして思ゝくく。さしもいのらぬ人の一巻二巻を力はのぎりよ著(シ)出ゝるゝむをとそ。其をほあゝゝてどりをやしる序文をも添ゝ吾兄のうへまてハ何ぞりの業りをいのゝゝび本論(モトツフミ)ありてる別記(ソヘブミ)なるを。をち

ゐくいひ〳〵て。拙き詞ふまぢもりてはやどり。
書まぎらしゐるもと。必吾兄の意ましられ
たづの〳〵や此序詞ともはべりて有ども。ゐるべはふ
おのれが思ひよるもとをとて。かく〳〵
しき長言を。書はべけるもりまる。

天保七年八月　伊勢　大神安守

大扶桑國考上卷

大壑　平篤胤撰述

門人　備前國　業合大枝
　　遠江國　關　武雄　同
　　上總國　大高秀明　校

諸越に古書ども拠閲に依て。其國の古傳説に。東方大荒外に。扶桑國と稱する神眞の靈域。君師ゝ本國にあて。その國初に出興せし。三皇五帝あど云ふは。謂ゆ依扶桑國より出て。万邦の道を開ける趣に聞ゆる。採集集めて熟に稽ふ依て。其扶桑國としも謂ふ依た。畏きや吾が天皇命ゝ神形ぐら知食に。皇大御國ゝ事にして。其三皇五帝と聞えし

は。我が皇神等ふ形も御坐しゝ所。其れ固より然るべき道理あるを。今それ由緒を述て。あれも天照坐大御神の。本形御國の大御光を輝さむと爲るふ。既く此方れ古人さち。其扶桑と云ふ地。皇國の漢名を爲して。詩賦文章の類ふも往往用ひ。それ三代実録・清和天皇紀・僧宗睿が傳れ文ア・八年到明州望鎮海・適遇李延年遙指扶桑將泛一葉宗睿同舟解纜歸著本朝・天慶六年の・日本紀竟宴・哥・橘朝臣直幹れ序ふ・聖上纂統天下無為・扶桑之域歸仁・細柳之鄉慕化云云ふど言へア・尚古き詩文れ集等を見て知べし・但し日向風土記ふ・大足彦天皇之世・幸兒湯之郡遊於丹裳之小野謂左右曰・此国地形直向日向と詔ひ・ひるむを・かく文詞せるあり・其は宜号日向と云るふて・ちう聞えさア・然れど此は扶桑を皇国の名と爲さる例とれ異あり・思ひ錯ふ及ばらず・まゝ歌文れ集・紀事の書れ名ふも負せる所ふ。近世の學者ふちは。其を非と論ア所も許多あア。然れど此れ古人れ皇國ア當さ所が實ふ叶ひて。其を非と云へる後人の論ぞ。却アて非ふれ有りる。扶桑ふ皇國ふ當さ所書名は。紀・齊名朝臣の扶桑集・藤原長清朝臣の夫木和歌集・皇圓法師が扶桑略記・水戸殿れ扶桑拾葉集あど是形ア。中ふも夫木集れ・それ奥書ふ・見えて・扶桑集と名けよ。大江匡房卿の雲・撰者の夢ふ語アしうば・扶桑れ日本国の総名ありて・其由ふ黄門為相卿ア・扶・字れ故くり・桑・字の木ふ取りて・夫木集と名けらるよと有しふ從ア・る由見え・下学集ふ・扶桑国ハ日本・揔名也・朝暾必昇於若木扶桑之梢故呼日本云扶桑国也・いい・日本紀纂疏ふ・凡吾国名通和漢有一十三と云へる中ふ・六曰扶桑国・東海中有扶桑雨幹同根日所出処・故借用とあり・此を非とせる説れ・松下見林の異称日本傳・井沢長秀が俗説辨・あぞふ見えて末ふ論ふが如し・然て・壒嚢抄・磯取・盧島の條ふ・兼名苑云・扶木一名・方四・一名・方出と云へる事もありれど・其所出を知らず。

斯て扶桑と云ふ名れ。古く彼國籍ゆ所見と依た。山海經な
ア。此經の海外東經ゆ云ふ篇ゆ。並ぶ出せる地名國名れ。み
な皇國分内ある由を稽へ明むれど。扶桑と指ふる國の。皇
國ゆ依こと。甚詳ゆぞ知るめ依。抑是經はも。漢れ劉歆ゲ校
定れ表ゆ。禹定九州。而益等類物善悪著此書皆聖賢之遺事
古之明著者也と記し。王充論衡ゆ。禹益並治洪水。禹主治水
益主記異物。海外山表無遠不至以所聞見作山海經と云ひ。
早く周代れ書。列子ゆも引と依文有れど。此よあき古書ゆ
依ゲ。中ゆ周代ゆ加ゆし文ゆアは。漢代ゆ加ゆと依篇も
有ア。其れ判然ある事な依ゆ。後人是義を得知らず。此書を

疑ふる倫も多一の依れ。濫く攷ゆざ依者なア。然るれ清の姚
際恒ゲ。古今偽書考ゆ。山海經漢志不著撰人名劉歆以為禹伯益撰可笑經
中言夏后氏殷王文王且言長沙零陵雁門諸郡縣歆不知欺誰乎此蓋秦漢間人所作者人已多論之矣と云ひ。四庫全書
提要及び簡明目録も同説ゆて。司馬遷称之則亦周秦以來
之古書也と云へア。司馬遷称之れ史記大宛傳の末ゆ。太
史公曰至禹本紀山海經所有怪物余不敢言之也と有るを
云るゆ。まさ偽書考ゆ。人已多論之ゆ云ア依れ。杜佑通典鄭
樵通志胡元瑞筆叢などゆ。早く論へるを謂ふなるぢし。
爰ゆ近頃清れ畢沅ゲ校正本を見れど。列子按夏革以為夷
堅所志。又夏革曰。大禹曰。地之所載云云。四十七字。是經海外
南經文。又呂氏春秋本味篇。按伊尹説多取此經夏革伊尹皆
湯時人則此經為夏書無疑矣。故自唐以前。劉歆奏。王充論衡。
趙曄吳越春秋。皆以為禹益所著。博物志曰。太古書今見存。有

神農經。山海經。水經注曰。禹著山經。淇出沮洳。又曰。山海經。創之大禹。紀録遠矣。鄭玄注尚書。服虔注左氏春秋。皆用山海經。疑此經自杜佑始と云るは。期せずして余が意に適せる說形。あわ條くに糅しき辨あり。此經を讀む人。必その校正本に就て見べし。然れど其注も未しき事ども多うり。まゝ按ずるに。隋書經籍志に。漢始簫何得秦圖書。後又得山海經。相傳以爲夏禹所記也と云ふる事も有。されば漢代に此經の傳はまる由來あり。今それ海外東經は全文なり。本書の次第は隨に舉て。說著にたと左の如し。いでや。日むかしは大樹のもとは神のまと。四方は木くちの言や免て聞け。

山海經海外東經云。䨻邱。爰有遺玉。青馬。視肉。楊桃。甘柤。甘華。甘果。所生在東海。兩山夾邱。上有樹木。在堯葬東。

本經此文は上に標して。海外自東南陬至東北陬者を云ひて。第一は是䨻邱を出せり。在堯葬東と云ふは。是東經なり。前ある。海外南經の終に。狄山帝堯葬于陽。帝嚳葬于陰と有る山を云。形まぞ。諸注は其所在詳ならず。然れども。彼國に。海內東南と指れた。豫州を中にして。揚州を云ふ域を謂ひ。まゝ海外は東南と指ずきは。必ずしも筑紫國を謂ふ例あれど。禹貢の時は揚州東面の中邊なる。東江携李などの海嶋に。堯葬あるべしむを推慮る。但しかく定むる由は。大荒岳山と有る郭注に。帝堯。帝嚳。帝舜。葬于者。大荒之中に有山名。旦天臺高山。海水出焉と載せる山は。疑

あく舟山補陀山を云ふと聞え海水出ッ焉とは灌門海の事
を云ふと聞ゆるを以て如此を思ひ定めつゝ但これ実に
華所なは非ズ郭注に按帝王冢墓皆有リ定処而山海経往く
復見レ之者蓋以テ聖人久於其位仁化廣及至於殂亾四海無思
不レ哀故殊俗之人各起レ土為レ冢是以所在有焉亦猶漢
氏諸遠郡国皆有天子廟此其遺象也と云るゲ如し是邊よ
ア正東は荒外ア直徑小推求むれど海上三百里餘りふして
我ゲ筑紫の薩摩國頴娃郡は海門岬也大隅國大隅郡佐多
岬は處小至る髭卯と謂ふは疑あく此處あり其は兩山夾
卯とは海門岬也佐多岬とふ夾まれて櫻嶋あ所を謂ふと
聞えばゝ海門岬小謂ゆる海門ゲ嶽ア此所ふ神名式ア
出ある枚聞神社ア國史ふは開聞と書れゝア今此山を
と謂ふは開聞の字音より称ひ來れるゝ或は此所のさま海門ゲ嶽
海門とも云ふ於べき形あれど別ふかくも称せるゆや或書

ふ海門山一名空穂島在上ふ樹木アアア也云ア依は櫻ふ也
頴娃郡枚聞郷と云へア上は髭卯は所の畢沅ゲ注ア淮南
城謂へるを知ア云ら之其は髭卯は所の畢沅ゲ注ア淮南
子作華卯と云へる其本文は地形訓
ふ彼国の東北方ゑる赤水の事を云ひて昆侖華卯在其東
南楊桃甘櫨甘華百果所生と有りて高誘注ふ皆異物也と
有るを云ひ昆侖也は釈名ふ丘一成ア曰頓丘再成ア曰陶丘三
成ア曰昆侖とあは思ふア昆侖華卯と云へ依ゲ開聞の嶽を
薩摩富士也称ひる事ふは思ひ合さるれどあり山海経ア
ふ海外北経の末ふも平卯とは相類ゝる卯ふ出せり然
れど其は華卯は聞えゝり故ア遺玉青馬以下は諸品を注せゲるは
訛傳也聞えゝり故ア遺玉青馬以下は諸品を注せゲるは
今は考ふ故しも要ゑふ事あれど明ア下の條くも此ア準
アて知ばし

大人國在其北爲人大坐而削船奢比之尸在其北獸身人
面大耳珥兩青蛇

大荒東經了。此國を出せ侯よは。東海之外。大荒之中有山。名曰大言。日月所出。有波谷山者。有大人之國。也有。まさ大荒北經了。有人名曰大人。有大人之国。釐姓。黍食云くと有るも。畢沅が言よ。此似釈海外東經大人国也と云へるが如し。然まて。釐姓と云へるも訛傳あり。本文は劉歆が校文了。一曰在鬣邱北と云へり。然るか同じ筑紫内了て。謂ある鬣邱の北了當り。日月は出侯所也も言べき大山も。日向國霧嶋山あり。然れば大人の國とは。此邊を言ひしと聞えあり。まさ波谷山也も。謂ある法華か。大言山の外了。日月所出也云へる山も。合虚。明星。鞠陵。猗天。壑明は五山あり。皆高山は名と聞あれど。何の山くを云ふ知がさし。ちて郭璞傳か。今の本文かも註を加ずば。大荒東經は。有大人之國と有侯所了。按河圖玉版曰。從昆侖以北九万里。

得龍伯國。身長三十丈。生万八千歳而死。此文を列子張湛が注了引さるは。長四十丈とあり。從昆侖以東。得大秦人。長十丈。皆衣帛。從此以東十万里。得中秦國。長一丈。穀梁傳曰。長翟。身横九畝。載其頭。眉見於軾。即長數丈人也。秦時大人見臨洮。身長五丈。脚跡六尺。準斯以言。則此大人之長短。未可得限度也と云ふ。まさ晉永嘉二年。有鵞鳥集於始安縣。南北里之鵞陂中。民周虎張得之。木矢貫之。鐵鏃其長六尺有半。以箭計之。其射者人身。應長一丈五六尺也。又平州別駕高會語云。倭国人嘗行遭風吹度大海外見一国人皆長丈餘。形狀似胡。蓋是長翟別種。箭殆將從此国來也とも云へり。今此を考ふるに。河圖が龍伯國は事を早く列子湯問篇は夏革が語か。天帝加の五神山を禺疆に命じて大鼇か戴ち志免給へ侯事を云る所了。龍伯之國有大人。舉足不盈

數歩而暨五山之所一釣而連六鼇合負而趣歸其國灼其骨以數焉。張湛注了。數筭計也。以高下周圍三万里。山而一鼇頭負之。又鑽其骨以卜。計此人之形當百餘万里。鯤鵬方之猶蚊蚋蚤虱耳。則大虛之所受亦奚所不容哉と云へり。一鼇頭と有る一を三の誤写あり。其を本書の全文を見るに。山を三鼇扶〳〵りて戴く由れきばあり。於是岱輿員嶠二山流於北極沈於大海仙聖之播遷者巨億計帝憑怒侵減龍伯之國使阨侵小龍伯之民使短至伏羲神農時其國人猶數十丈と有るを云。況あきど。此を今の本文に大人とは。固より別ふして。此了引出ぢき事ゑ非ず。然るは夏革が此事の談ゑ及べる を。是より前了殷湯が物有巨細乎有修短乎有同異乎と問ひ。其況ゑ依て巨細の別を諭さむ為ゑまゐ大壑に大ゑ說き。この於此龍伯人と。僬僥人の長短異ある事ゑ及び。然て下ふ鯤鵬の巨大ゑ。蜩と微細とを比諭せ況了て。僬僥人をば殊了東方と云へれど。龍伯了東方と云へざるを思ふぢし。斯て是僬僥人を東方ゑ云へるは。故実了況事あり。其を三五本国考。第三條の附録了云ふを見て知べし。偖この僬僥に本拠の事れるゑ就て思へば。龍伯の說も。古傳ありし事了て。寓言ゑ非ず。然れど此を今し要了る事ふも非ざれば由あらむ時ふまさも論ふべし。はゝ大秦。中秦。長翟れぞれ傳說を殊ゑ叶はず。按ふ了此を今も。謂ゆる南阿賣利加の分内ふ。巴太碁羅須とて。長人の國了る由あれば。其傳說ゑ訛れるふも有るぢし。此謂ゆる巴太碁羅須の事を荒井君美ゆしに采覽異言了。其見聞ゑ及ばれし。長人の傳說を集めて。其所見を述られ。山村昌永が此書に増訳了。西洋書を數部引きて。精く載せり。まゝ古微書の河図玉版に所ゑも種〻の書ゑ。長人の事実ゑ拾ひて。論へる說等あり。就て見るべし。偖まゝ海内北經了。大人之市。在海中と云へ況ゑ。大荒東經ふ。有大人之市。名曰大人之堂。郭注。亦山名。形狀如堂室。正大人時集會其上。作市肆也。有一

大人。踆其上張其兩臂。踆或作俊皆古蹲字莊子曰踆於會稽也○畢沅曰臂旧作耳今据太平御覽改正

也有なれ。山市海市は類ふて。然る幽界は。時あるて現見

也。此物ふれば。此も本文とは固より別義ふり。彼國ては。

東海邊ふて見由ふれ也。皇國ふては。東北邊の国くは山

ふて。時く見る事あると聞さる。此を見さは人くは談を聞き

して往來ふ狀を見る事あり。或は世の画き傳ふる山越の

弥陀といぬ物ふ見成ふ事も有りと云へり。甚も奇異ふ

る事ふこそ。外や三神山考ふ記せ

ふ海市山市の所ふ合せ考ふべしかくて今の本文ふ。大人

國在其北云くと云へる國は淮南子時則訓ふ。東方之極自碣石山過朝鮮貫大人之國高誘云碣石在遼西界海水西畔在其東東至日出之次榑木之地青土樹木之野榑木榑桑皆日出之地也大

皐句芒之所司者。万二千里。と有る大人之國ふて。我ゞ筑紫

國を稱るふる。其は次條ふ論ふる俟る。○奢比之尸在其

北云く。郭注ふ。神名也。珥以蛇貫耳也と。劉歆ゞ校文ふ。一曰肝榆之尸在大人北と見えたり。大荒東經ふ。此事を載せるふは。有神人面犬耳。

獸身珥兩青蛇名曰奢比尸有五采之鳥と見えたり。即大人

之國と號はし域の北境ふ。此神は住める由ふる。

君子國在其北衣冠帶劒食獸使二大虎在旁其人好讓不

爭有薰華草朝生夕死。蚩尤在其北各有兩首朝陽之谷神

曰天吳是爲水伯在蚩尤北兩水間其爲獸也八首人面八

尾皆青黃。

君子國を大荒東經ふた有東口之山有君子之國其人衣冠帶劒郭注了亦使虎豹好謙讓也と云ふ。畢沅曰淮南子云東方有君子之国高誘注云東方木德仁故有君子之国說文云東夷从大大人也夷俗仁仁者寿有君子不死之国孔子曰道不行欲之九夷乘桴浮于海有以也彼國よりも東口之山と指さる方位を按ずるに肥前肥後の西面より筑前筑後豐前豐後の邊まで城云ごと聞也然れども此を大概れ議ふこそ有き實には深く拘を依る事ふ非ず然るは大人國君子國ぞ二ツ別て稱にきと。淮南子を始め諸書を參攷ぜ依ふ實は一國に二名を稱せ依ふて同じ筑紫の域内を云へること著明ぞ。然れど其は前れ筑紫は都し給へる間の事にて山海經の成きる當昔までも然有りし故に右れ如く記せしあり。然れど神武天

皇以後に大人国君子国と云ふは都て然らば大人之國と皇国域内を指ことと云ふも更あり。然れども君子之國ぞも稱せる由來は如何と云むに。まず大人ぞは皇國ふた人世と成ても九尺一丈計ある人多く脛の長の七握八拳ぞるも有しらば況て神世ふ大人は多のアし事おし量るぞしはふ衣冠帶劒して讓を好し爭ふ事ぞく。嚴然ぞして君子の風ぞアしも皇御孫命は都し給へる國内ふまだ然有しこと疑ふし然れど此はもと皇國は自稱ふ非ぞ彼よアて稱せる號ぞるに其由來を尋ぬれば彼國の古代に君王大人ふアしは皆皇國は神眞の渡アて給へ依ふ依故ふ其君師大人の本國さる義をもて號けし者ぞアて其は

天地人は三皇を更なれあ。次なる六皇及び太昊氏・女媧氏なぞの皇国より出づる由を既に春秋命歴序考よりも云へれど。豈此皇等のみあらむや。神農・黄帝・少昊・顓頊・帝嚳れどの聖人さちも皆皇国より出て彼の君師と為れるこぞ。三五本国考は論ふを見て知べし。偖其君子國と云ふ稱を件れ山海經の外ふも。古く黄帝本行記に。鳳凰の至れる事を記せ所に出。於東方君子之國云くぞ見え。許愼が説文・京房が易傳あどよも此説を出せるを此記を取れる物ら。然も有らば本行記いと古き書なりと。淮南子地形訓ふ。東方有君子之國ぞ有ふ高誘注ふ。東方木德仁故有君子之國。其人衣冠帶劒。使二文虎一也ぞ云へ。塗吉が校注に。按説文解字曰。東夷從大人也。夷俗仁。仁者壽。有君子不死之国。即与此解同と云へる。然る言は。後漢書は東方曰夷。天性柔順。易以道御。至有君子不死之国焉云くと有り。然て本文の諸本は。二大虎と有ふを後漢書の注そ。の餘れ書にも此文を引さるは二文虎とあ。大抵山海

經の成れる當昔城按ふに。彼土の海外東ふ。衣冠帶劒して。禮讓ある國を。皇國を除さて有こぞ無し。是を以て皇朝は古き學者さちも。三善清行朝臣は意見封事れど。其餘の紀文ふも。此君子國と云ふを。皇國の事と形し。彼国人まさ直情れるは。後までも然稱せ。紀。其は續日本紀に。大宝二年は。粟田眞人は。遣唐使とちて罷ぞれる。彼国の楚州と云へる所は人ども。皇朝の使人さちを見て。聞海東有大倭国。謂之君子国。人民豊樂。礼義敦行。今看使人儀容。豈不信乎ぞ云ふ事あり。さは彼国は常人の道情れるが直言せるを。中くに官途の族。まさ學者等あどは。強て彼国人に甚く劣れる趣は曲言して書載せる習れるを。此方の學者は彼土は心引ふ倫を却りて其曲言をし。信は事とぞ思ふめる。抑君子ぞ稱せふ本義は。君は君王は義子は丈夫の通稱ふて。大夫を夫子と稱ぞふ子ふ同じ。大夫を夫

子と稱せる事は古書大抵さのる中ふ左傳昭公七年九月
れ下ふ孔子を夫子と稱せる事ありに孔疏ゐ身爲大夫乃稱
夫子此時仲尼未仕不得稱爲夫子以未仕之時爲仕後之語
是丘明意尊之而失事實陳恒未死言謚亦此類也ゆ有ふて
知ぢし然れど師長を夫子と称ゆるは是より轉用せる語
あり但しそは彼土こそ有れ俗の漢学者ども謾ま
師長を夫子と称ゆ所ゑ句読を授け詩文を教ふる村里の
凡師長らが諸ひ居るを傍痛き事あり此は序れ多ど驚ろ
し論ふ
のみ。ちて君子とはも少君王を稱ける語ゑ故ゐ民ふ
對し衆庶ゐ對し小人ふ對し云ふこゆ多ゑのゆ其は易の大
象れ文まゝ繫辭傳ゑどよ君子と稱せる條ゝを見て知ぬ
し禮記玉藻の鄭注ゐ君子ゆは大夫士也と云ゆれゆ大夫

士ふ稱ひるを稍末ゐて此よゆ轉ゆて後ゐは賢き淑人を
云ふ稱ゆは爲れゆ其は論語ふ孔子の君子と稱せ所條ゝ
十ま七八は王公侯族ゐ當るを其二三は賢者ふ云ゆ孟
子ゐ至ゆて其方ふ專と云ふ言ゆ爲ゝるを以て知ぢし漢以
來唐宋までれ儒者の注疏どもま然所淑人を君子と称れ
る事の本義ゑ説得ゝる解を見ゆ故是を以て煩しき所為
まは有れど經書及び諸子ゐ君子を称ける句ゑ摘み章ゑ
探求て加くは定め切近くは荀子王制篇ま天地生君子君
子理天地君子者天地之參也方物之摠也民之父母也無君
子則天地不利禮儀無統上無君師下無父母云ゝと云へ所を
始め君王を云へることと甚繁く賢人を称せるも亦計ふる
ま暇あらば猶別ゐ著れ孔子聖説考ま云ふを俟べし。
ゝ大人國と云ゆ所義は皇國よゆ渡ゆ給へる神聖ゝち緯
書どもふ伏羲氏九尺有一寸神農氏八尺有七寸黄帝氏身

逾九尺れぞ有おとく。彼國人よりも文高のまし故ゐ。其國人どちの。丈短さゐ合せて稱せるゐ本ゆて。其徳ゐも叶ひて稱せりと聞ゆ。彼国れ古尺を。我ゐ曲尺の七寸五分ゐ當ること。赤縣度制考ゐ委曲ゐ論へるを見るべし。然きばこそ是まゝ小人ゐ對し。民庶ゐ對して。君師さゐ人を稱ゐれ。其ゑ易の文言傳ゐ。夫大人者。與天地合其徳。與日月合其明。與四時合其序。與鬼神合其吉凶。先天而天弗違。後天而奉天時。天且弗違。而況於人乎。況於鬼神乎と見え。荀子解弊篇ゐ。明參日月。大滿八極。夫是之謂大人とあるも是義あり。まゝ孔子家語ゐ今の文言傳と同文ゐして。大人の二字れ聖人と訓れる孔語あり。周易ゐ。利見大人ゆを云ゐ。語の許多ゐ。ゐを乾鑿度ゐ孔子曰。易有君人五號也と云へる語中ゐ。大人者聖人之在位者也と見え。孟子離婁篇れ趙注ゐ。大人謂君也とも有るを。相發して辨ふ。ゐし。小人と云ふゑ。君ゐ對して元ゑ民庶の事ある。ゐ。君王ゐ自ゐ。ゐらゐ威儀ゐり。礼讓ありて正しきを。民庶ゑそれゐ反れる行ある故ゐ。まゝ轉じて拠ゑ其行いの好ゐらぬ者なゑ。大人君子ゐ對して。博く小人と云ふ事とゑ成れり。大人君子は。もと君王の事ゐ。ゐ。博く賢人ゐ云ふも是ゐ同じ。ゑ。譬へば。坊舍れ主さる貴人の僧形ある。ゐ。坊主ゆ云ふより轉じて。今世ゐ四頭れる人をゑ。拠て坊主と云ふを。頭ゐ髪ゑ有おゐら。四頭ゐ。ゐ者れ為べき職を勤むるをも。坊主ゆ名くる類ひゐよく似さり。然れゑ今れ本文ゐ。大人君子と。國名を二ゐ別されど。唯一域ゐ二名を稱せる者れるこゆ。君子ゐ大人とも稱し。大人ゆはもと君王の事ゐ。ゐを思ひ合せて知ゐし。斯て其大人國と云へる文ゐ。爲人大坐而削船と云ひ。君子國ゆ云へる文ゐ。使二大虎

在旁と有るは。此経の古圖ふ。古の畫なて有れ旨由れ已。其
畢沅が校正ふ云へる如く。凡て是経・南山・西山・北山・東山・中山
の五篇れみ・実ふ伯禹れ書紀れるが・海外以下も本経ゑ附
りて傳ゑし・海外山川・人物等の図れ有りるふ・周代の人・そ
れ図の古説ゑ集記せし詞書ある多・後ゑそれ意を得て見ざれむ・解し得が
文書れみ存れるあり・故
さき文ども多ろ已・今の二文も・即其詞書あり・坐而削船と
も。其古図ふ・大人れ虎狀を示せむと為て画さりと聞え・使
二大虎在旁やを然る最然さる君子れ嘉ゑ・その使ふ二大
虎を画れる由あり・次くの文ふ
も是ゑ准ふべき事ども有り。
けて和漢の古人ども君子
國ふ。皇國の事と爲ふ流ふ。井澤長秀が論ふ。我が國ふて。虎
を使ふ事れく。薫華州も無れむ。皇國の事れらぞと言ふれ
ぞ。此を頑なる説形已。其を爲人大ぞ云ひ。衣冠帯劒。好讓不
爭と有るは。並てれ風ふて。虎を使ふと有るは。並てれ風を

謂ふゑ非ぞ。是ふ以て大荒東経ふた。君子之國。其人衣冠帯
劒とれみ有ゑて。餘事ふ記さぐ。又後ふこそ然る事ゑ有ゑ。
神世の多ふ流神等れ中ふ。韓國よゑ虎を生捕已來て。畜ひ
馴し使ひ給へる事の有むも何ゑ疑はむ。彼所れ僊人等ふ
も。然る倫多かれむ。神世ゑ然る事れしと云べうらぞ。古く
巴提便れ虎を手捕ふして。舌を抜きて蹈殺し。豊臣大臣の
時ゑ韓国より生捕已來れる虎の當時れ益荒男さちふ見
て恐りさる事の記録ども
ふ所見ふ流をも思ふべし。まゑ薫華州ふし也言ふれど。薫
は董れ誤字ふて。木槿ふ古と著く。此は山ゑも里ふも。叢
生ける物れる故や。薫の誤れる由た。郭注ふ・薫或作董と見
夏之月・木槿榮・詩云・顔如舜華・即董也・本草謂之朝開暮落花
へり。但し此た其苗の朝ふ生じて夕ゑ枯
董為董無疑と云へり。

添〳〵由ふた非ず。其花の朝ゟ開さて。暮ゟ落るを云へるあり。
○後ゟ説郛ゟ出せる。玄中記を見れば。君子之国。地方千里。
多木槿花とあり。まさ張華が博物志ふも。君子国人。衣冠帯
劒。使二兩虎一。民衣野絲。好礼讓。不争。土千里。多薰華之草。好讓故
為君子国。見えさり。○虹。在其北。各有兩首。郭注ふ。虹。音虹とも。
虹。蝃蝀也とも有れど。虹を司る神を謂ふと聞ゆ。○朝陽之
谷神曰天吳。是為水伯云〳〵は。大荒東經ゟ。有夏州之國。有蓋
余之國。有神人。八首人面。虎身十尾。名曰天吳。と有て。夏州之
國蓋余之國ともゟ。筑紫内の小地名とも聞ゆれども。詳ふ
らず。天吳の居所も。朝陽之谷と云ひ。有兩水間と云へるゟ按
ふゟ。豐後國佐加關と。伊豫國三埼也れ間ある洋を謂ふゟ。
其も此邊はも。南ふ大洋あて。北ゟ内海ゟ。兩水ふ間れさ

添所ふれど。後ゟ生田国秀ふを見て云ひらくも。朝陽
之谷も即湯谷ゟて。朝字の添はりしは。日
月所出とも云へる谷ふ。故ゟは侍らじゟ。其在兩水間也有
るも。此辺も也ゟて内海ふ。其谷を中ふして見さらむ
ふも。兩水間と云むも難れゟ。依べくや。但し此文の続き
青邱国云〳〵を隔て。黒歯国の下ふ。湯谷と重複せれど。其
は豈これのみ。れらめや。此經凡て重複の多りれど。かふの
くふ朝陽之谷。即湯谷ふりと見さる方。穩ゟは侍らじゟ。と
云り。第五條湯谷の
所と合せ考ふべし。

青邱國在其北。其狐四足九尾。帝命竪亥步自東極至于西
極。五億十選。九千八百步。竪亥右手把筭。左手指青邱北。

青邱國とは。東方朔ゟ十州記ゟ。長州一名青邱。在南海辰巳
之地。上饒山川。又多大樹。乃有二千圍者。一州之上。專是林木。
故一名青邱。又有仙草靈藥。甘液。玉英。靡所不有。又有風山。山

恒震聲有紫府宮天眞仙女遊於此地と有る長州是あり但し此文に南海に有はた東南とあるし東字は落ゐ居れるは其は何を以て知ると言むに廣黃帝本行記に東到青丘見紫府先生登於風山受三皇內文天文大字云く呂氏春秋に禹東至鳥谷青邱之鄉まゝ清靈眞人傳に乃遊行天下東到青丘遇谷希子云くあゝ有りて一向に東方と指さるを辰巳之地に云るに相合せて辨ふべし即ち此徐州の東南海外の辰巳に當る由なるは書れ傳說多うれど盈に引出さば然らば其青邱とは何處あると言ふに大人君子は國の北に在る由なれば筑紫の北面に火國豊國を本にして四國本國にうゐ迄を廣く指さると聞も其は長州と云ふ號も由有るて聞えそれ青邱といふ名は正に大樹は繁茂せる故は名あるを火國より東南に木國に至はまで神世のわゞは殊に大樹は茂れるに思ひ合されるに扨十州記に其域內に有風山山恒震聲と有はも伊豫國に風早郡あるは烈風ある所なはに相符ひて聞ゆれば然るは其大樹どもの事は第九條の末に盈く引出るを見るべし まゝ今引なはに書等に紫府宮紫府先生谷希子 まゝ三皇內文といふ物の事れどは本編にて其狐赤縣太古傳は三皇紀に委く云ふを見るへし

四足九尾は大荒東經に青邱之國有狐九尾と出さる郭注に大平則出而爲瑞也とのみ然るに海內南山經にも青邱之山其陽多玉其陰多青雘有獸焉其狀如狐而九尾其音如

嬰兒能食人食者不蠱とあるは別ふて乃本文は青邱を云ふ名を海内ふ移せるれア其れ本文れも眞の九尾狐ある城南山經れるは狐ア如く所獸の九尾れるゞ住ス所故ふ姑狐と稱せ所あらむ凡て彼国れ地名ア此山れ名のみれらず海外の地名ま移せる名いと多し其れ然る地名の出る処くま云べし此て帝命竪亥云くは山海經れ更ふあ他れ古書ふても斯の如ま事ア打任せて帝と稱せるは多く天皇太帝城指せり然るふ此條れ劉歆ゞ比校ふれ一曰禹令竪亥云くを有ア淮南子まも禹を有る城黄帝本行記ふは乃黄帝れ事と爲くあ今何を是とも思ひ定ム難し此れふあ後生の考按ま俟ち べし此て其謂ある東極れ天皇太帝の世ま始め

給ふ時ア大地の四正ふ立給ひし謂ある四極の第一ふて岳瀆名山記ふ東岳廣桑山在東海中青帝所都と有る域を云ひて此れ神典ア伊邪那岐大神の自凝嶋ふ天柱國柱と立給ひし を有る御弟れ化まる山即是ふア淮南子地形訓ま東方曰東極之山曰開明之門と有る高誘注ア日之所出也故曰ふ開明と云へるも此山ふあり れ本編ま云を見るべし此山今現ふ淡路國ア属ふて其西北隅ふ在るを此所ア立ちて西ま向ア ば青邱ま依阿波伊豫豊前筑前肥前れゞ皆其左手ふ指ふアア斯て下文ま謂ある湯谷れ此山よあ正西ア當アて程近き内海ア在り然ま ば此内海の所ふ竪亥を居しめて四方の極ふアア極ふ至る里程ま推歩せし ま云る由ふアア

歩を畢沅が注ふ。鄭君注尚書大傳云。歩推也。高誘注淮南子云。善行人誤矣と云ふ。此を理さる言ひあり。然れど推歩の歩を。もゆ歩行して算せる了出さふ。此語ふるこゆ。已別ふ考へあれど。此は漏し拠。右手把筭。左手指青邱北とは。乃竪亥の圖象に有狀を謂ひ。諸本ふ筭を算ふ誤れり。今は畢沅が校本ふ據りて改め拠。筭は説文了。長六寸。計歴數者。从竹弄。言常弄乃不誤也とあり。歴象測量の事。まさ我が東極より起原せるふと。是よて其端倪を知るべし。此事委くに。三曆由來記了説さふ子見るべし。

黑齒國在其北。爲人黑齒。食稻啖蛇。一赤一青。在其旁。下有湯谷。十日所浴。湯谷上有扶桑。有黑齒北。居水中。有大木。九日居下枝。一日居上枝。雨師妾在其北。其爲人黑。兩手各操一蛇。左耳有青蛇。右耳有赤蛇。

大荒東經了。有黑齒之國。帝俊生黑齒。郭注。齒如漆也。聖人神育。多有殊類異狀之人。諸言生者。多謂其苗裔。未必是親所産。姜姓黎食使四鳥。也あり。有其北云くは。青邱に北了。竪亥の筭を把りて西了向ひ。左手ふ青邱を指さふ圖あり。其北ふ此國を畫く。其所ふ黑齒れる人を畫きて。其傍ふ二蛇を畫添ふ。一に赤蛇。一は青蛇なる由れり。黑齒之國とは。乃黑齒の生國と謂ふが如し。帝俊とは。帝嚳高辛氏の一名ふり。前ふは郭注ふ。俊。亦舜字假借。音也ゆと云る説ふ依りて。虞舜に事と爲さふに悪ふり。紀。其に路史高辛紀了。帝王世紀を引きて。帝嚳生而神異。自言其名曰夋。山海經作俊。言帝俊處甚多。皆謂嚳。郭注皆以

為舜謂舜俊音相近失所考矣と云ひ畢沅が山海經に注まさ徐文靖が竹書紀年の統箋も路史と同説にて共に然る事あきだれり。ちて黒齒は郭注に齒如漆也。聖人神化無方故其所降育多有殊類異狀之人と云るに依れば其國人みな黒齒あるべと謂ふには非ず。此一人のみ生あるに其齒の黒きを故に是名を負しぞ聞えあり。但し郭注に諸言生者多謂其苗裔未必是親産と云るを彼處れ先輩ら多く此説に依さきど此は帝嚳の親産なること疑なし。ちて本文に爲人黒齒食稻啖蛇と有るに就て臆説あり其は何也とむ書名を忘れあり。彼國籍に食稻者齒白食禾者齒黒と云る語に有れば。此人稻は食ずぞ齒の黒き意とはさ若くは好みて蛇を食ひし故に蛇毒を解せむと鐵醬もて常に齒を染て在りしも亦知ぬらず。然れど上に郭注に聖人神化無方云々と云るに拠まば予が今の説はみな強言れ有り。何れに依るとも其国なべて其為人なりと謂ふは非ず。帝俊の親産せる一人の黒齒ありし事は論ひなくあむ。下に引く呂氏春秋黒齒之国と有る所は高誘注に東方其人齒黒因旦黒齒之国と云るは山海經の文をよく察ざる誤なり。ちて下に有湯谷湯谷上有扶桑とは黒齒國は圖より下に湯谷は圖を畫き其湯谷の上に扶桑國を畫る由なるが。然のみ言ひては黒齒は湯谷の上に在ぬぞ異名同處の如く聞ゆる故に。はさ在黒齒北居水中在大木と云ひて共に湯谷は上に有るとど其州の各別なる由を示せるれば。此は古人の文辞は丁寧深切なる所あり。心を潛めて視るべし。故是方位説に據り呂氏春秋求人篇に禹東至博木之地日出九津青羌之野鳥谷青丘

之郷。黒齒之國。高誘注。博木。大木也。津。崖也。淮南子。日出暘谷。青羌。東方之野也。東方。其人齒黒。因号黒齒之国。○増注。博木。即扶木也。と有るを照し合て其所在を索むるか。先謂也る青邱も。既か云ふごとく。筑紫の北面なる豊國を本とし て。其東西の國くを指こを疑ひ無きむ。此豊國は北りて。黒齒國か當る一渚を索むるか。豊後は國崎の東郡。伊波比洋の西南よ。今現り姫嶋と稱する嶋あり。此も神典り二柱神。已り大八嶋國を次くか生給ひ。然後か。まゝ六嶋を生給ひし中か。女嶋亦名謂天一根。と有る嶋あり。黒齒之國も疑れく是なり。前り是扶桑国考を草稿せし時よ。此国の所在を未タ思ひ得ず。我が南海り在る島国は名あり。早く其古名を失ふる故よ。其国は今の某島と云こを決め難しと云へるも。今思へむ拙りりよ。其も右呂氏の文も更

あり。淮南子脩務訓か。堯西教。沃民。東至黒齒。北撫幽都。南道交趾。と有る高誘注り。沃民。西方之国。黒齒。東方之国云ゝと有るよて。我が東方なること著し。然るを郭注よ。魏志の東夷傳を引きて。倭国。東四千里有裸国。裸国。東南有黒齒国。船行一年可至也と云へれど。本文り。扶桑。有黒齒。北。と云ひ。諸書よ。扶桑は彼国の東海外よ在りて。日の出る所を云へるよも合ざれむ。此は荒唐至極の妄誕れりりし。其は此姫嶋も下か。豊前國企救郡か屬りる速鞆の湍門なり。此も神典り。伊邪那岐大神。豫美都國も穢悪を濯除ひ給ふ所り。乃往見粟門及速吸名門。然此二門潮既太急。故還向於橘之小門而拂濯也。と有る速吸門か。是疑ふく湯谷なり。然るも其所在。本文か黒齒下在湯谷と云へるか符合ずばなり。但し神典なる速吸門。まゝ姫島の在所も。師も古事記傳よ。詳り考へ得られざりしを。速鞆も湍門やゞて速吸門なる事を。小倉の殿人。西田直養といふ人識り考へて。速吸門考

ぞいふ物を書き。女島の事も。豊後れ杵築の殿人。小串重威と云ふ人よく考へて。姫島考と云ふ物を記せり。其二説ともよ。古史傳まゝ本編ゑ出せれむ。今其定説をれ みぬ出せるあり。ちて呂氏春秋ふ。日出九津ぞ云へるは。即本文の湯谷れゆ。此谷もしも。本編三皇紀及び三五本國考ふ言ふ如く。黄帝書ふ謂ゆ扶谷神不死。玄牝之門。天地之根。老子れ謂ゆる百谷王。列子ふ謂ゆる大壑無底之谷れるゞ。扶ゝ此を甘淵とも稱ふ。そは大荒南經ゑ。東南海之外。甘水之間。有羲和之國。有女子。名曰羲和。爲帝俊之妻。生十日。常浴日于甘淵。と有る是れ。此文。今れ諸本ゑ誤字錯乱あり。今も初学記ゑ引さ扶文と。校合して引ゐる所。羲和之國ぞは。羲和の本國ぞ云意の稱。扶ゞ。まゝ此を少昊之國とも謂ふ。そは大荒東經ゑ。東海

之外大壑少昊之國。少昊孺帝顓頊。于此棄其琴瑟。有甘山者。甘水出焉。生甘淵。と有る是ゆて。此も少昊の生國と云ふゞ如し。少昊も。謂ゆ扶五帝の第四ゆて。黄帝れ子あり。黄帝乃ち顓頊も黄帝れ曾孫ゆて。五帝の第五あるゞ。此も西蜀の地ゑ生れしゝ。此国ゑ在しは故ゆる事れり。帝俊も黄帝れ曾孫ゑて。唐堯の養父あるゞ。此国ゑて生れゝり。委くも三五本国考を見扶べし。ちて大荒南經の文ゑ。羲和生十日。と有るも。郭注ふ。言生十子。各以日名名之。故言生十日。數十也。ぞ云へ扶は然る言ゑて。日名とは。甲乙丙丁等れ十干を謂ふ。此もと太昊氏の。日數れ名ふ用ひむ料ふ。作ゆ給ひし物あるを。羲和れ生ゆる十子の名ゑ命ゝる由あり。そは大荒西經ゑ。帝俊妻常羲。生月十有二。此娼浴日。と云ひ。海内經ゑ。之と。ある注ゑ。羲与羲和浴日同。

共工生后土。后土生噎鳴。噎鳴生歲十有二。と有る注に。生十二子。皆以歲名之。故云然と云へるも皆同じ例あり。常浴日于甘淵とは。十干を以て名けし子等を常ふその間を

る甘淵に浴せしめて。育養せるを謂ふ。乃本文に。黑齒下有湯谷。十日所浴也有る相照し攷ふるに。甘淵と謂ふも。乃湯谷の別名。羲和之國と云ふも即黑齒之國。まゝ少昊之國

名に係ふ也。甚明ふ知らるゝ。然れど此は一渚にして。三名を稱せるなり。然れどその彼に稱せし名ゆて。實も神典に謂ふ女嶋なるこゝ。上に云ふが如し。此国はかく三名を稱せる事は。譬へば孰の国にはあれ。同国の産なる人三人あるを其国を云ふ。某麻呂が国とも。某子が国とも。何彦が国とも云ふと有るが如く。古へも黑齒が生国。羲和の抑是嶋を姫

嶋としも謂ふ由を。神典に出づる昔語に。新羅國にて。阿具沼ちふ沼の邊に。一賤女晝寢しに依ふ。日耀虹の如くそれ会に指さる。一賤夫その狀に異しと思ひて。恒ふ其女の行ひを伺ふに。此女それ時に妊みて。赤玉を産む生りる。

三五本国考ふ引さる諸書に。少昊の母女節の。大星虹如く下れるに。夢接して少昊を娠み。顓頊母女樞れ。瑤光虹如れ如く其宮に入れに感じて。顓頊を妊みしと有るも。星と云へるも耀れる故の文にて。実を此賤女の会門を指さる日耀に同く。是ぞ謂ゆる天根玄牡れ氣勢ありりる。其を第七條の注。暘谷咸池れ名義を説く所に謂ふを見べし。彼賤夫それ玉を乞取ゆて。恒も裏みて腰に著りに依を。後に由

ゆ。其國主の子ふ幣と爲りて。然るふ國主の子。それ玉を床邊に置しうば。即美麗き孃子ふ化ゆぬ。茲に妻と爲し

て在りるか。其嬢子常に種くれ珍物を設りて。其夫に進め
しらば。夫の心奢りて。妻を罵れば。吾を汝の妻に爲べき女
か非らず。吾祖は國に行むと云いて。竊びて小船に乘りて。
逃遁れて。皇國に來れるぞ。比賣語曽神と爲れるよし見え。
此の事を古事記應神天皇段と日本紀は垂仁天皇紀の一
書とに載られさるが。其傳の趣異ある事ども有り。合せ見
て其異を知べし。 攝津國風土記と。日本紀とを併せ考ふるに。其始
免て著さる處を。豐國は國前郡。伊波比は比賣嶋なりと有
りあり。此乃二柱神の生給へる女嶋。亦名は天一根とある嶋
かて。此を比賣嶋と謂ふを。是比賣神の來り住める故れり
とふ說に。誠に然る事とは思ふ物ゝら。此を人世と成り

て。後は故事あるを想ふに。是より古く義和は住める由緣
かなりて。神世なりしを。ちろ號け來れるも亦知ぬゝらぞ。
其は義和と云ふを。彼国は傳へし漢名かこそ有れ。実を皇
国の女神かし有れば。此方にて称せる名の。別に有りむ事
を云ふも更なり。此小串重威ぞ姫嶋考か。此を彼比賣神の。
其夫に遁れて來り住める嶋なるぞ。今は赤水明神とて此
女神を祭るに。其神體を木像かて。婦人は筆を持ち。齒を染
むる容れり。古は赤水明神と白に由を。其社の在る岩下よ
り。赤錆の鋏醬水かぐれ出て。手を拍てば響かに應じて逆る
故に。拍子水と名付け。土人を明神は靈水なりと言ふを記
せり。此を黑齒國とも謂へる故事か。能くも符へる實蹟か

アのし。まさ姫島考ヲ俗説ヨ此比賣神をいふを眞野の長者と云ふ者れ姫玉世媛の事として彼拍子水茂明神の霊水あかと云ふより古へを知らぬ者の猥ヨ神像を鋏漿ヲ鋏漿ヲけ石楊子栫ヲど云事をも設け出て名所の證をせし物ヲり然るを齒を染る事を我ゲ国中古より れ風儀あれども上代ふは然る事れりを諸ひ後人の所為あること疑あしと記せ法を已も前ヲを諸ひあれど今思へば眞野れ長者ゲ姫れ事を非ヲをど黒齒国と名ゲしを此霊水の固より有アし由縁ヨ求めて義和まさ帝俊れ生める子も齒を染めて在りし故あるヲ又或は彼黒齒も帝俊れ子あれむ凡常の戎人れ種族あら没実を大国主神の遠ゲらぬ御裔れをむ固より神ぐ古く好みて齒を染ゲむ因縁ヲより然ふ霊水の沸出て今ヲ至れる実迹あるも知ぢゲらば内て神典ヲ此嶋の亦名を天一根と謂へ法名義を壹岐嶋れ亦名を天一柱をヲ有るを海中ヨ離れて一ッある嶋れ当故の名あをば天一根と云ふも然る義の名ヨやをも思アど此嶋大壑暘谷の傍ヲ在る嶋を法故ヲやゲて此ヲ國名とをて大壑ヲ昊之國とも人皇氏まさ義和れ子等を出ヲ于暘谷をも云へ法を亦れ玄牝天地根れるヲ想ひ合をれど二柱御祖神れ内る幽契をもて名ヲ給へ法も亦知ぢゲらば其を凡て国くの考ふるヨ其本名と為さるゲ却りて後ヲて亦名といふ名ぞ二柱神の當者号ヲ給へる名あると思ふ由を既ヨ古史傳ヲ論へれど今更亦委くを云はず抑かの比賣語曾神れ吾祖の國ヲ行むとて此嶋ヲ來れる事を師説ヲ皇國を日大御神れ御生ませ法本國あるゲ故れアと言れしは然法説れれど尚按ふ亦天日れ御國を也此よアヲ判りし物あるヲ況てそを所治看ひ大御神これ近ヲ間あ法橘之小門亦て生坐せる故

小。祖國(オヤノクニ)とは云へる事にて。其を祖(ミオヤ)れ本國と謂ふが如し。此を本編に委く記(シル)せるが。其概略を下ふも云べし。ちて速吸門(ハヤスヒナド)ある湯谷れ上(カミ)。姫嶋(ヒメジマ)さる黒齒れ北に在りて。水中小居(ヰ)と言へば。扶桑國とは。長門周防に續(ツヾ)く。大倭豐秋津嶋(オホヤマトトヨアキツシマ)を總稱(スベイヒ)し名れる古を著(シル)くはさ有(リ)大木と云へる依て。即(チイハ)謂ふ依扶桑木れ依古を言ふも更れ。大倭豐秋津島を。二柱(カミ)神の生(ウミ)ませる国の多に依中(ナカ)小も。国れ長子(カミ)ある故に。やはり有(ア)む。なぞし島くは勝(サ)れる大州にて。西比張門の豐浦郡より。東を陸奥れ津輕(ツガル)南部の端に至(ル)まで。一連に長大に成(ナリ)し国あること。既に古史傳に云へる如(ヲナジ)あれむ。扶桑国を。都て此辺(ヘ)まで云へると心を得べし。但しそれ扶桑大樹の下枝(シモツエ)に九日居(ヲ)。上枝(カミツエ)に一日居(ヲ)と謂ふ事の由を。さく小言(イハ)むを紛(ヒギラ)はし記事ども有れむ。第七條れ下(トコロ)小説(トク)くを俟(マツ)へし。○雨師妾、

在(リ)其北云くは。郭注に。雨師(ウシ)謂(ヒ)屏翳(ヘイエイ)也を有(ア)。初學記に。雨師(ウシ)曰(ヒ)屏翳(ヘイエイ)亦曰(ヒ)屏號(ヘイガウ)とも云へ(ヒ)。雨を司る神の漢名れ(ア)。風俗通に。玄冥(ゲンメイ)為(ナス)雨師(ウシ)とも見(ヘ)ゝり。妾を云(ヒ)ば其女神に有(ア)む。劉歆が校文小は。爲(ナリ)人(ト)黑身人面。各操(ル)一龜(ト)とあり。偖(サテ)上件奢比之尸。重く。天吳。九尾狐。この雨師妾れを更あ(ア)。山海經中に。れを種(クサ)ぐれ神物どもれ。現形せる由を載(シル)せ依を。大荒西經れ顓頊令重(ヲモ)獻(ヲ)上天(ニ)令黎(ヲ)卬(ス)下地(ニ)とある所れ郭璞注に。古(ヘ)者人神雜擾無別(ジ)と言(イ)ひ。史記の歴書小も。其世の事小。民神雜擾。不可放(カフ)物云くを有る如く。當昔(ソノカミ)未顯幽れ間(ヒダ)分(ワキ)くしから爻。右の類れる神物。おの人に形を隱(カクサ)さ依も有りしあり。列子湯問篇夏革が語に。鯤鵬

あどの事を云ひて世豈知有此物哉大禹行而見之伯益知而名之夷堅聞而志之と有るをも思ひ合にべし然る小漸くに神物は人を避りて世に現形せざ成ぬるを顕幽別アしと謂ふ此を我が神典にても其趣詳に知られさア但し今は其現形ある紀を以て然ふ物無しとれ思ひそよ今も昔に替ら弥ど隠身して在るが故に人常に見ふ事あき形アに其を何にありとむ奇談を集め記せる正しき物に宝永四年に富士山の燒出むとする前に その麓れる村内を夜深りて獣れあまさ行りはひ有ふに怪みて各こそと指れぞき見れど有ゆふ諸獣打群れて去行く趣なふふお中に此山の獣王と見やる大きある獣の総身に目あるが諸獣に囲繞せられて立退くを見さりしが其後なども無く山の焼出て泥砂を吹立さふに謂る宝永山を出来しを云へる事ありき まさに近く文政六年に事あり駿河国阿部郡に て正月六日雪の零れる日に井川村と云ふアに腰越村と云ふまで其道三里に間の道に巨人の足迹あり長一尺八寸幅

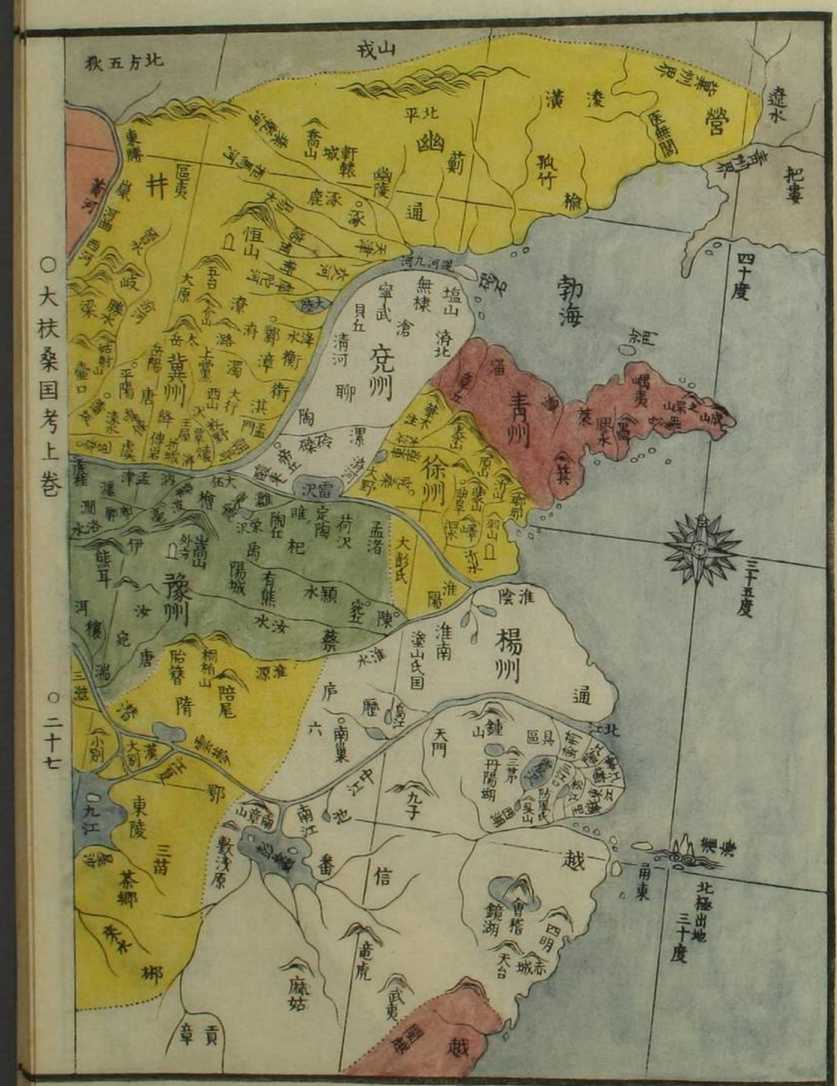
八寸一歩の間一丈ばかり有り腰越村の入口にて足あと雖さアに此村に者に其巨人を見さるなり裸躰にて其肩は軒より上に出さりしとぞ此に其村の名主次郎兵衛といふ者に新庄道雄が紀にて語るに記せり斯の如き物ども今に常に現見ふること無く隠身して在るど時に現に見る事も有ふを以て古今に現隠れ異こそ有れ今も然る物あきに非ざる事を辨べしかる類の事ども博く雑志ども読み国々の人にも探索て聞持てる事ども数有れど然のみを此に記し出さば

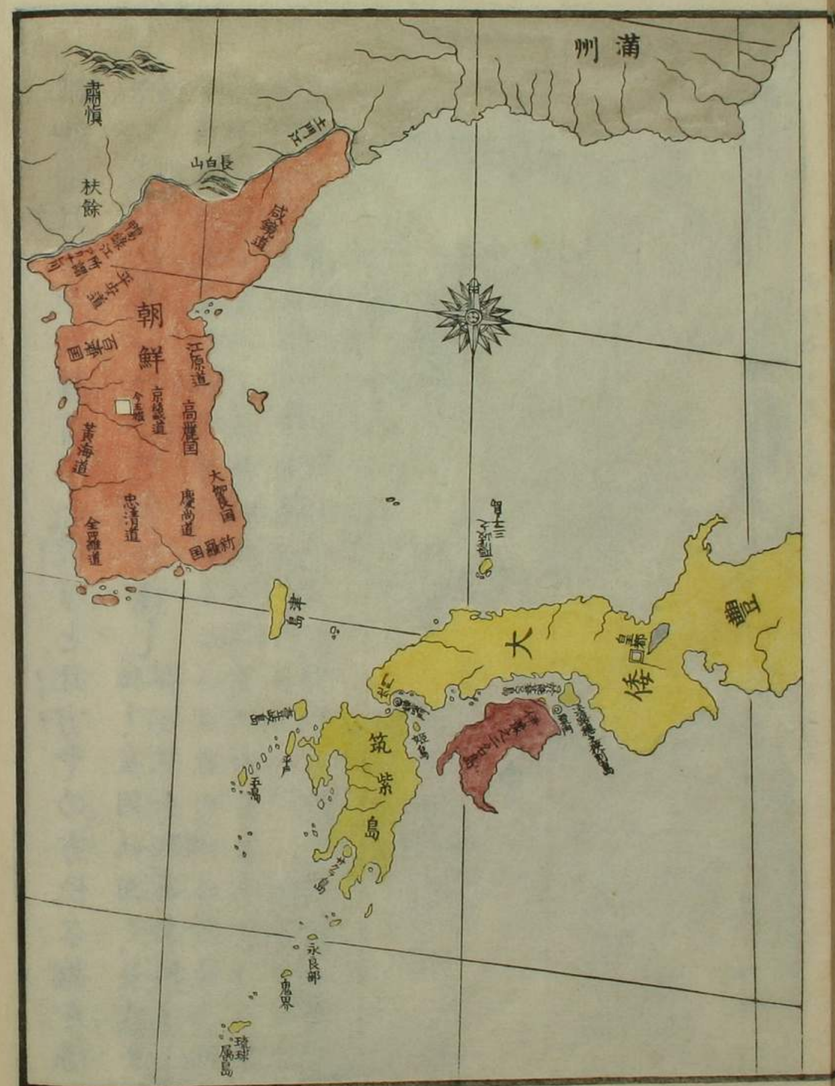
玄股之國在其北其爲人衣魚食軀使兩鳥夾之毛民之國在其北其爲人黑

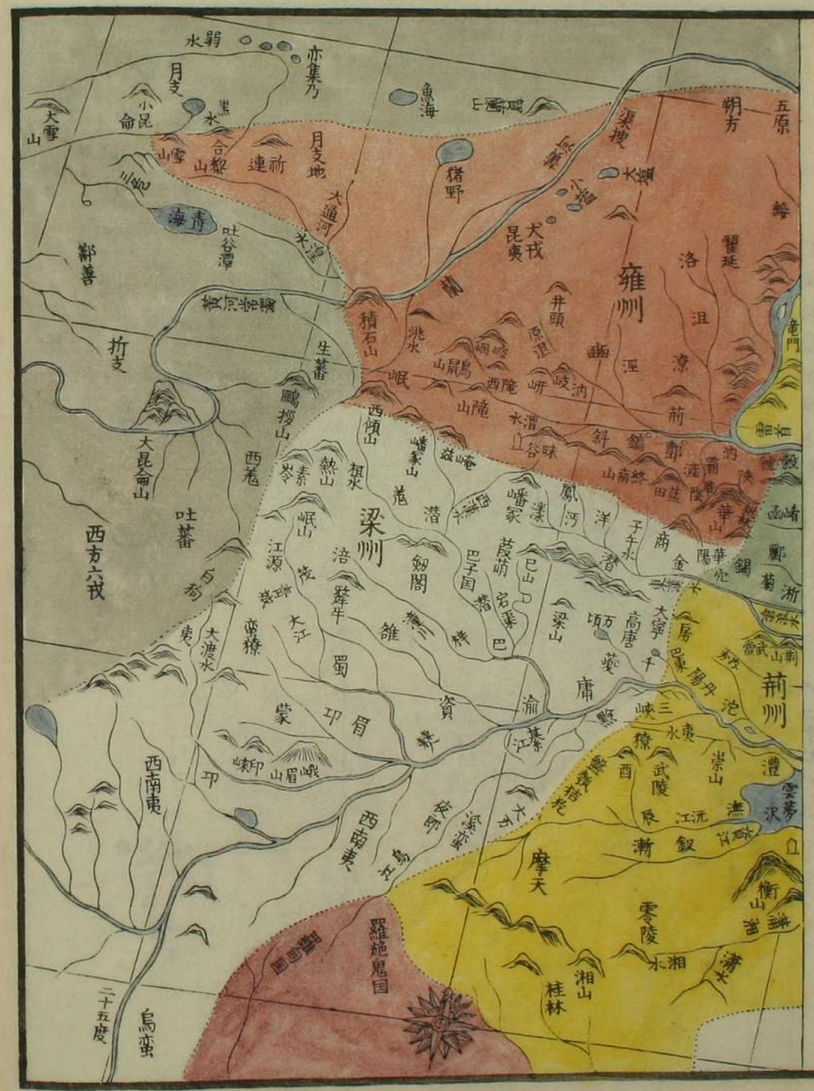
大荒東經に有招摇山融水出焉有國曰玄股黎食使四鳥と有るに此の玄股之國を釋せるあアに郭注に髀以下盡黑故云玄股以魚皮爲衣也軀水鳥也と云ひ毛民之國に大荒北

經ふも。有毛民之國。依姓食黍使四鳥禹生均國均國生役采役采生修輅。修輅殺綽人。帝念之潛爲之國。是此毛民と有り。然れば夏禹は末ゐと。玄股。毛民。勞民と合せて三國。みな扶桑は北に在依由あれむ。我が奥蝦夷は嶋くを云へるこを疑ふし。毛民の郭注に。今去臨海郡東南二千里有毛民在大海州島上爲人短小而躰盈有毛如豬能穴居無衣服云々。を云へる風俗は似たれど国の所在は方位違へり。此は非説を爲べし。淮南子地形訓。三十六國の所に。自東南至東北方有大人國。君子國。黑齒民。玄股民。毛民。勞民を有るは。是經を採て載さ依あと。高誘注に。毛民其人躰半生毛若矢鏃也。勞民正理躁擾不定也と云へり。ちて右條くの方位説ふ據ゐて。皇國と赤縣州を相接ける樣を。度數に合せて縮圖をるふと左

れ如し。凡て予が著書中ふ。彼方と此方をの方位を論を依件くは。皆是圖ふ於ゐて索むぢし。但し皇国は図は長窪玄珠が日本路程全図よよの万国全図に拠と。赤縣朝鮮及び蝦夷等の境界。まさ度數の矩は。測量所板土沿革地図は禹貢図職方図に本ぢき。明は一統志。まさ図書編ふど諸書の図説を校し。中は朝鮮の図は。三国通覽は附図は本於ゐ。且いふし予皇国より。日本府を置て馭め給ひし時の古説を。古典ふ考へ合せて。安藤直彦ふ令製さる大図あるを。今かく縮図せし免さり。精くは其大図に就て見ぢし。


北方五狄
戎山
營州
幽州
冀州
兗州
青州
徐州
豫州
揚州
荊州
梁州
雍州
渤海
四十度
三十五度
北極出地三十度


滿州
朝鮮
高麗国
大倭
筑紫島


雍州
梁州
荊州
西方六戎
西南夷
西南夷
烏蠻
羅施鬼国
摩天
雲陵
桂林
湘山
衡山
巴蜀
蜀
巴
庸
蒙
邛
冉
資
渝
梁山
巴山
鄂善
猪野
青海
月支
月支地
大通河
連祁
合黎山
小昆命
大雪山
弱水
亦集乃
流沙
五原
明方
洛
沮
漳
前
斜
鎬
渭
涇
汧
岐
井頭
積石山
生蕃
鵰摎山
大昆侖山
西傾山
熱山
嶓冢山
潛
沔
漢
褒
斜
鎬
商
金
華陽
華山
鄭
渭
函
峣
鄭
渭
淅
荊
武
房
丹
均
沔
漢
三峽
崇山
澧
雲夢沢
衡山
湘
水
桂
林
高唐
巴
名蜀
巴
巴
巴

帝、太皡、其神、句芒。鄭玄云、此蒼精之君、木官之臣、自古以來、著德立功者也、太皡、宓戲氏也、句芒、少皡氏之子曰重、為木官者也、淮南は時則訓ふ。東方之極、自碣石山、過朝鮮、貫大人之國、東至日出之次、搏木之地、青土樹木之野、高誘云、搏木、搏桑、皆日所出之地也、太皡句芒之所司者万二千里、大皡、伏羲氏、東方木德之帝也、句芒、木神、司地主也、尚書大傳ふ。東方之極、自碣石東至日出搏桑之野、大皡句芒司之、あど有り。ゐ本編高辛紀ふを見べし、ちて海外東經は全文さ〳〵ふ云竟さり。故上黒齒國の條ゐ說遺さる。湯谷扶桑の事は、も。復更ゐ論はむふ。彼は文ふ。在黒齒北、居水中、有大木と云、ふた。卽謂ゐる扶桑ふて。九日、居下枝、一日、居上枝と有は。例は繪詞ふて。彼十日と稱せる羲和の十子は。一人は上枝ゐ昇り居し。九人は下枝ゐ昇り居さる圖の由あり。其はまさ大荒東經ゐ。湯谷上有扶木。一日方至、一日方出、皆戴于烏、とも有ふ。は合せ考ふるふ。十子相代り居さ。此高木ふ昇り居て。身を暴せる圖象ゐて。此は沐浴は故實と聞えさり。然るを義和生十日とある所ふは、右の如く、十日を十子と說き、郭注ふ。九日、居下枝、一日、居上枝と云ふ所ゐは、傳曰、天有十日、日之數十、此云九日居下枝、一日居上枝、大荒東經又云、一日方至、一日方出云〻とて、莊子淮南子を始め、諸書を引て天日の十箇ある由を證し、廣注まさ畢沅ゐ注も同說は是ど皆非あり。天ふ豈眞の十日有むやも。殊ふ實の日象あらむふは。戴烏とは云、彦くも非。人形は故ゐ云へり。文ゐよく心を於りて辨ふべ文あり。但しのく云はゞ日中有烏と云へる。旧文俗說を引出ふ人も有むゐ。其は於淮三五本国考の末條ふ辨ふるを見て知べし。其は於淮南は天文訓ふ。日出于暘谷、浴于咸池、拂于扶桑、是謂晨明、登

于扶桑爰始將行と有ふ暘谷を。卽上の大壑甘淵湯谷ゐて。諸書ゐ。或を陽。まゝ嶋ゐども作ゝれど。共ゐ此谷を名ゐ用ひしは。易の義ゐれど。三字同音ゐて。此を本編ゐ委曲せる如く。天日を始めて分判せる谷ゐ由緒ゐ因りて。元易ゐよゐて建し始まふ故の名ゐて。然れど海外東經ゐる湯谷の郭注ゐ谷中水熱也と云。るを前ゐを何ぞや思はれど。然も有べし。然て左太冲が吳都賦ゐ經扶桑之中林包湯谷之滂沛とある注ゐ湯音陽と云へるは正義ゐり。然れど陽もゐ阜ゐ從ふ字ゐて。迂遠ゐれど。実ゐを暘湯とも。音易とこそ注べゝれ。謂ゆる陰陽の正字は。會暘の字を用ふるゞ正しきこと本編ゐ論ふ如ゐれどれり。斯て畢沅が校正本ゐ見れど。虞書宅嵎夷曰暘谷。說文作暘。史記索隱云。史記旧本作湯谷。淮南子云。日ハ出テ暘谷ニ浴ス。于咸池。按湯暘嵎皆一也と云へるを。余と同意の說ゐて。ちて日を暘谷ゐ出て咸池ゐ浴し。扶桑ゐ拂ふゞ云へるは。

天日を此ゐ始めて分出せる古說と。彼十日の。扶桑暘谷ゐ沐浴せる故事とを合せて。日くゐ新ゐそれ谷ゐゐ。出行る趣ゐ章れせる文詞ゐて。然るを天日はしも。其生て始めれ天日。乃今れ天日ゐて。日くゐ新ゐ生り出る物ゐを非ざゐこと。神典の古傳ゐ。大地と成るべき物の中ゐより。葦邪れこゞゞ萌騰れゐ物ゐて。それ天日ゞ成れる由ゐゐ思ひ合せてかくを論ふゐり。近ゐ年ごろ何人ゐゞ。日月東湧地平図說といふ物を著して。日月共ゐ日くゐ大東洋中ゐより。新ゐ成出る物ゐる事を。神代古說ゐ得て。蝦夷地四十度の所ゐて。慥ゐ実見せる由の說ゐりと闡て。予未其書を見ゐど。暗ゐ其說の妄ゐ察る。後生迷こゞを勿れ。實ゐは天日及び其大御神。ゐれ御國ゐを生坐せれゞ。大地を放て宇宙を照ル世と爲て。天は。天日のもゞ生出し處とは云べゝ。日ゞゐ新ゐ此御國ゐて出とは云ばゝ。然れど上古漢土ゐて東と号れし。扶木の在し地を

云ひ、其地を即皇国ゆて、実まも春氣起より発生して、万物を鼓動し、万国を育養れること、顕然されむ、日くり此地より出ぬと云むも、理あ然れむ博桑暘谷を、天日の出さる處き説とは云べらば、

と云ふ説のみ、眞れ古傳の遺れるふて、十日れ説を、別り一故事れ混淆せる者あ所こと、三五本國考の末條ふ、委く辨明を依を以て知る及し、

王充論衡了、儒者論曰、旦出扶桑暮入細柳、扶桑東方地、細柳西方野也、桑柳天地之際、日月常所出入之処、問曰、歳二月八月時日出於扶桑入於細柳、今夏日長之時日出於東北入於西北、冬日短之時日出於東南入於西南、冬夏日之出入在於四隅、扶桑細柳正在何所乎、所論之言、猶謂春秋不上謂冬与夏也、と云る論を、上了論へる古義を知らざる論あり、そは夏を東北より出で、冬を東南より出れど、春分秋分、これ東西の正位あれむ、此を本とさて、東より出て西ま入ると謂ふ、子細あき事あ所ま、天文訓了、暘谷咸池を二名を稱ゆれど、此も同所れ異名あ及、

其を山海經了、湯谷了浴ゆを有るを、浴咸池と云へるふて著く、此は謂ゆる對文の格あ及其例を下ふ委曲ま論ふ如く、扶桑若木を同樹れ異名ゆる歟、楚辭離騒了、飲余馬於咸池兮、揔余轡乎扶桑、折若木拂日と文さる類あり、

王逸が注ま、咸池日浴處也、揔結也、扶桑日所拂木也、言我乃往至東極之野飲馬於咸池与日俱浴以潔己身結我車轡於扶桑以留日行幸得不老延年寿高大也と云へるを、能く叶へり、然るま扶桑と若木を別木の如く説き、まさ折取若木以拂擊日使之還去ゆを云ひ、或謂拂蔽也、以若木鄣蔽日使不得過也とも説き、淮南子れ高誘注ま、拂猶過也と注せるふど皆非あり、此を拂祓同韵了、実を扶桑を折取りて、己身の汚悪を祓除ゆる義あ所物をや、

沐浴れ二字ふふと心留ゆて、説文を撿るり、沐濯髮也、从水木聲、浴洒身也、从水谷聲とれみ有及、木ふ作ゆ谷ふ作る

所以を注せず。茲に段玉裁が注に。沐字を。引伸爲芟除之義。
如管子云沐樹之枝と云ひ。浴字を。老子浴神不死。河上公
曰。浴養也。夏小正黑鳥浴。浴也者。飛乍高乍下也。皆引伸之義
也と云へり。河上公注の老子。今本にも。普通に如く。谷神。不死。谷養也とあり。其餘の諸本にも。浴神と作
さるをば未見及ばず。故誣しむ人も有べけれど。段氏を妄
誕の人と非ず。さる本も有りはよこそ。此も本編に記せる
谷神玄牝。やげて暘谷有りと云ふ。已が考へにも叶ひて。畢竟有がある本ありうし。今按ずるに。管子
を輕重篇にて。沐途菊之樹枝。使無尺寸之陰。まく沐涂樹之
枝也れぞ有りて。樹枝を伐拂ふ事なり。老子に。谷神を浴神
と作さる本の有るも。古へは水を从ざ旁も。浴と同音同義な
りし故に錯れしにて。沐浴の二字ともに。扶桑暘谷に木谷

せ旁故事なり。起れる文字なるかと疑はし。然れど二字共
に水に从ふも。中くに後の狡意あり。大抵諸字は。謂ゆる會
意を以て扁を从しより。本義を失ひさる類は。今數ふ旁に
暇ならず。上に謂へ旁湯暘陽暘なども。乃其一例と知べし。
然れど此は。今頓に臆断せる事なれば。他の字
書ぞもに。相類せる説の有りや無しや知ぞうし。はさ夏小正
と引さ旁は。其十月は文なり旁。黑鳥浴は三字その本文に
て。以下は戴氏が傳文なり。然るに此を阮元が補注本は一
本に。黑鳥者何也。烏也。浴也者。飛乍高乍下也と有旁に正と
爲べし。然は有れど。飛乍高乍下也と云へるは。浴を翼の義に
取れるにて。甚じ非説なり。此は早く渡邊之望が。夏小正

埒解といふ書に。浴者。猶浴乎沂之浴。此言。時有烏浴于水涯也。と云へるを用ふ。こゝ。あゝ其説は予幼而在田壁与農圃居焉与鳥魚游。審其四時。權節所謂小春之際。種麥刈菁之時。藪沢溝洫之麋。往く有浴水之鳥。村童野老。見以為雨候也。嗚呼先王敬小之明。徴諸本邦。今日而不繆矣。況其大者。庸得不畏敬乎哉。但是此等事。眞儒之所用心而以博雜虹愚蒙以為禽犢書篇之所忽。且大笑也。学者所須當査看也とも云へり。諸ある言れり。ちて上代よりかく烏浴は諺あるし歟思ふに。彼羲和の生める十日は子等ぞ。頭は烏形を戴く依事も。此烏は浴は效ふ依古儀の圖象ありて。其を烏は浴して後。かれら交木は栖ぬて。翼を伸べ干に物ありさまは形ぬ。前は烏浴は今も雨候と云れぬ。頭は烏形を作り戴き。木谷して雨を祈れる図象ありむ。其を大荒東經に。黄帝の應龍を使いて。蚩尤を殺せる事を記せる文中は。旱為應龍之狀。乃得大雨と有り。其郭注に。今之土龍。本此氣應。自然冥感。非人所能為也と云へ。依て。神農氏の祈雨止雨法は思ひ合せて。知ぬ。こゝ。るぞ。神聖の道ある事をも知べしと。書ありしろど。今按へば然る儀ぬ。然らば其大壑。甘淵。暘谷をまゝ咸池とも云ひし義は如何と云ふ。池を初學記に。此谷は事を。曰。天池。一曰。朝夕池。亦云。大壑巨壑。と有る池ふて。地字と共に女会は義ありり。咸を感と通じて。易は澤山咸の咸ふ同く。交咸の義ぬ。謂ある暘谷咸池。やがて大地は会門ぬ依ぶ故ふ。地字を作依ふ。土に女会の象形さる。也を合せて作れる古と。説文解字を見て知べし。然れぬ池。其を續字まゝ。女会ふ因れる字ありること。謂ふも更ありり。其博物志は古説に。子曰。乾動直。靜專。坤動開。靜翕。其根也天根。毎日兩度。蹴入尾閭巨壑。則海沸出潮。と有る如く。天日ふて降る玄牡の氣勢は。毎日兩度咸入して。天易地会は構精あ

正。潮汐をれ玄池ある由れ名あり。是を以て黄帝書ふ。古ふ玄牝之門。天地根と云ふ。然るは天地と分れし会門あるべばあり。抑和漢の古傳ふ。天地の初めふ一ツ物大空ふ生れり地とふ分れしふ。天地初分と云へり。是を以て天日を常ふ玄牝の象を建し。大地は常ふその氣勢ふ玄牝ふ受く。天地の橐籥ふと謂ふを是あり。此ふ資りて万物れ生成あり。これ会易構精の大意あり。然るふ其玄牝天根。まゝ時くふ。女人の会ふ感ぶる事ふあり。彼阿具沼ふ畫窠しふ陰賤女。まゝ少昊顓頊あゞれ母ふちふ感ぜし。耀光虹れ如しと云ふ物玄れちち是あり。但これ玄牝玄牡れ精義地の実理ふ仰觀俯察して細密ふ考へさる説有れど其れ今さゝふ。其百中一ふも云ふこと能を定。然れゞ斯ふ計りの端緒ありとも言定てを心得ゞされ事ふあらむと如此を記し於委く其義を擴孫むと思はゞ。古史傳の天地初発れ條ゝ。

まゝ祓祓の條と。赤縣太古傳の三皇紀とを合せ見て知るべし。黄帝れ樂名を咸池と稱ひしも。是池の名ふあり出さゝ。然れど唐堯の樂名ふ。大咸ゞ云ふ陰も。此義ある事知べし。然ふ陰ふ周礼大司樂大咸の鄭注ふ。咸皆也。池施也。言堯德無所不施也。と有る孔疏云へるを。都ふ故実を辨へざる説れり。ちて此咸池暘谷。やごて速鞆れ湍門ふて。神典ふ謂ゆ陰速吸門あるふ就て思ふ。此ふあゆゝ西方。筑前國れ北面ある。玄界洋ちふ邊ふ。伊邪那岐大神の。禊身ませ陰橘小戸ふあり。抑大神。さゝふて祓除を爲給ふれど。其初ふ速吸門を見給ふ。潮太く急しとて。橘小戸ふて祓し給へる茂思ふ。其汚悪も。謂ゆる大壑無底之谷さゝ陰。速吸門ふあ。根國へ祓ひ給はむとの御事

ふて。畏りれど。此時生坐ふる日神月神の御初浴し給ひしも。決定て此端門あらむや推察らる。是事れ精説。まさ此り記の段と。太古傳の三皇紀とよ。然ま。しがさし。古史傳の御禊注せるを合せ見て知べし。皇紀とよ。然ま。ば神世よ神等れ御禊を。大かさ七水門ふてぞ爲給ひりむ。故その由緒りよ。姫嶋よ住める義和。まさ其産め子等を常ふこれ谷ふて。浴せし事とふそ想ふるれ。偖ふ惟ひ續くれむ。前り顙項の大壑ふ。其琴瑟を棄さ。ふや有るも謂ゆる祓具よ棄さふふて。是はさ大神れ御身ふ附給ひし物ども。皆ふく〳〵ふ棄給ひし例を傳へし態れるふと知ぬし。然らむ彼國の。沐浴禊祓ふやの所爲さ。ふ。皇國り習へる事ふぞ有り。其れ説文を始め字

書ども。ふ。祓除悪祭也。从示犮声。徐曰。按祓之為言拂也。除災求福。又絜也。又除也と云ひ。禊はもと潔字ふて。臨水祓除也。ふやぞ有るを見て知べし。皇国の身潔祓除れ有趣り異ること無く聞えさり。〇因り記に我が漢風の号ふ大壑と称ふる事を。二十二三戈の時ふりき。一日ふと。莊子の天地篇を披きりる。東ふ大壑やいふ谷ある由ふて。夫大壑之為物也。注焉而不滿。酌焉而不竭。吾將遊焉。と云へふ文を見て。面白く覚え。其頃漢学を專とせし時ふれむ。深き思慮もれく。古を号とふて。物ふも記し。印ふも作りて在りるふ。十年ばり前より。大壑やがて玄牝之門。暘谷。咸池。百谷。王ふる事を知アさるが。近頃まさ神典れる。速吸門さる事を知得て。其やごと無き所ふふを思幽り。陋き拙き已が号ふ称へむ事は。畏く僭上れる事とは思へど。年來用ひ來りし号れるり。せむ方ふく。仍是号子用ふるを。元こ丞不意り出さる事よし有れむ。見む人其。偖かれ。罪を恕し給へや。扶桑大樹れ。彼土の海外東方ふる事を。諸書の説符合して。異論ある事れし。其れ楚辭東君歌ふ。暾將出兮東方。王逸注謂。日始出東方。照吾檻兮扶桑。吾謂其容暾暾而盛大也。照吾檻兮扶桑。

旦也。檻、楯也。言東方有扶桑之木。其高万仞。日下浴於湯谷。上拂其扶桑。爰始而登。照曜四方。日以扶桑為舍檻。故曰照吾檻兮扶桑。撫余馬兮安驅云々。東君とは即日を稱ひ。まゝ上りも引さる離騷ふ。飲余馬於咸池兮。咸池、日浴処也。揔余轡乎扶桑。揔、結也。扶桑、日所拂木也。折若木以拂日兮云々。哀時命ふ。左袪挂於榑桑右袪拂於不周兮云々。れぜをあり有ひ。不周ぜを。西極之山れ名をあり。委くは天柱五岳考ふ説くを見るべし。此文を西極の不周山と。東極れ名る扶桑とを對して。道德の盛大ゑりして。包ざる所あきを比へさるあひ。呂氏春秋求人篇ふ。禹東至榑木之地。爲欲篇ふ。北至大夏南至北戸。西至三危。東至扶桑。不敢亂矣。高誘注。亂、猶離也。淮南子天文訓ふ。日出于暘谷。浴于咸池。拂于扶桑。是謂晨明。暘谷を本文れ湯谷あり。咸池とを。上ゑ引る離騷の辞ゑ合せて思ひで。暘谷の一名ふるを。出于暘谷。浴于咸池と云へるは。上ゑ云へる如く互文あひ。登于扶桑。爰始將行。是謂朏明。至于曲阿。是謂旦明。云々。高誘云く。朏明、將明也。旦明、平旦也と云へり。地形訓ゑ。世界れ大九州の名を出せる所ゑ。正東、陽州曰申土ぜ見え。扶木、在陽州日之所。曹とも。登保之山。暘谷榑桑在東方。高誘注ふ。暘谷、日之所出也。榑桑、在登保之山。東北方也とも有ゆゑ論ひ無し。漢以來れ詩賦の類ゑ。此名の出さる。今計ふるを暇あらず。其を文選ふどを見ても知るべし。けて其榑桑れ字義を。許慎ゞ説文解字。木部ふ。榑ふ。榑桑、神木。日所出也。從木專聲。段玉裁云。桑下曰。日初出東方湯谷。所登榑桑、叒木也。然則榑桑、即叒木也。東下曰。從日在木中。杲下曰。從日在木上。皆謂榑木也。淮南子高注亦曰。榑桑、日所出也。同部ふ。扶。扶疏四布也。從木夫聲。段注。扶汲古刊。木從手非也。今依玉篇五音韵譜。集韵類篇正。扶之言扶也。古書多作扶疏。同音假借也。上林賦。垂條扶疏。劉向傳。梓樹生枝葉扶

疏上出屋楊雄傳枝葉扶疏呂覽樹肥無使扶疏是則扶疏謂
大木枝柯四布疏通作胥亦作蘇鄭風山有扶蘇毛曰扶蘇扶
胥木也 ○見え扶榑ともふ。徐鍇ゲ音註ふ。防無切と有ア。然
れど諸書ふ扶字を書ふ仮た。假借ふて正からず。凡て扶字
ふ改むぢきあア。扶た説文ゥ佐也从手夫声
と有りて是も防無切あり。はさ同書ふ。弱、
日初出東方湯谷所登榑桑。叒木也。段注按當云叒木榑桑也。
日初出東方湯谷所登也上
榑桑已見木部此処立文當如是離騷總余轡乎扶桑折若
木以拂日二語相聯若木即謂扶桑扶若字即榑叒字也象
形。枝葉蔽翳凡叒之屬皆从叒と見え。徐鍇ゲ音註ゥ。而灼切と言
ひ。まゝ通釈ゥ。叒木ハ即榑桑十州記説榑桑両く相扶故从三
又象桑之婀娜也爾雅注曰婀娜垂條也此又不音右直象
形耳東方木德故有神桑耳略切と云へり。桑を蠶所食葉木从叒木と見え。徐鍇
の通釋ふ。異於東方自然之神木加木以別之自然叒字象形

而簡也斯郎反と云へア。段注ふた榑桑者桑之長也故字从
叒桑不入木部而傳於叒者所貴者
也息郎切と云へり。此等れ説ふ依れど。扶榑ともふ其音夫あア。扶桑
れ桑は。もと叒を書ク。其音は而灼切ふて若あれば。扶桑た
フジャクゼ唱ふべき筈。フサウと唱ふ仮た。桑字を書ふア
起れる後れ訛音あア。桑た通釋ゥ斯郎反と有れど。音サウ
れどど。其た蠶れ食ふ。常の桑樹ふ用ふる時こそ有れ。榑桑
と熟字せる桑をば。古へふ從りて。ジャクゼ唱ふべきあゼ著
明あア。古今韵會ふ。若字れ所ゥ。若木東海木名也と見え。説
文の段注ふも。若木即謂扶桑扶若字即榑叒字也と
ゆり。字彙ふも。叒を而灼切音若日初東方暘谷所登榑桑叒
木也と云ひ。若字の註ゥ。音弱。若木木名あど有り。上ふ引さ
る説文及び通釈と思ひ合せべし。○まゝ小林元儁云叒字
れ音若ある故た。中村蘭林の学山録ゥ。楊愼ゲ答李仁史書

を引きて・日之為字・有人忍任日・是其四壱・其音若音熱・是其切響・音若日・生於若木・故毛詩之音叶之・音熱者・日本陽類・而影炎・故楚辞之音叶之・今楚南方言・猶呼日頭為熱頭・是其證也と見由・あゐ音ジヤク・又セツあるべきこと・諭は考へ得さり・其ゑ中は草の初生・葦牙の萌出依負りして・生青出申黄若あゐど皆此字より因りて製れるあり・其は豫て承ゑれる字書を作らむ時り云べし・ちゑ桑木・即搏桑也ゑ有ゑ・ゑ同木あ依こと論ひあきを・山海經淮南子れどゆ・東海れ扶桑ゑは別り・若木ゑ名くる樹れ有るは・所以ある事あり・其ゑ尸子ゆ・大木之奇霊者為若とも・木食之人・多為仁者・名為若木とも有りて・東方れ眞若木の奇霊れ依なも然ゑ名けしあり・尸子れ全書ゑ畧く凹びさり・今引く文ゑ・山海經の郭注より引さるを略引さるあり・然るゑ山海經・大荒北經り・大荒之中有衡石山・上有赤樹・青葉赤

華・名曰若木・西山經り・多搖木之有若れど有依是あり・大荒北經の文意ゑ・赤樹ゑいふ木あり・青葉赤華あるゑ・若木より似さる故り・若木と名くと云へりゑ聞え・西山經の文意ゑ・搖木の奇霊ゆして・若木の如きゑ多し・と云へる意と聞えさり・其ゑ郭璞注り・右より挙さる尸子の文を引まて・此ゑ共り眞れ若木あら・孫ど・若木ゑ名りさる趣より説さるをも思ひ合れべし・まゝ海内經より・南海之内・黒水青水之間有木・名曰若木・若水出焉と有るも・彼國の海内南方あれど・眞若木小非ば・此ゑ晋れ稽含ゑ・南方草木狀り・朱槿花莖葉皆如桑・葉光而厚・樹高止四五尺・而其花深紅色五出・大如蜀葵・云〻と有る樹を・本草綱目小・扶桑とも名くゑ・李時珍ゑ言依ゑ・疑ひく此樹れ・此木何頃より・皇国より渡りて・鉢植あゐど作りて・人れ見る物あ依ゑ・朝開暮落の花ゆて・木槿ゑ云ふ木の類あるゑ・霊木れど云べき樹り非ゑ・まさ甚く寒氣

を恐ふ〳〵
木あり。まゝ淮南子、地形訓。南方荒外に所ふ。若木、在建木
西。末有十日。其華照下地と有ふに。眞の若木は扶桑なるを。
はゝ凡て大樹の奇霊なる故。若木とも云よりして。其眞物
ならぬ若木ゑ。扶桑に形狀を混雜しふふあり。其に末有十
日を云へるゑ。扶桑ふ謂ゆふ說なるを以て辨ふべし。但し末有十日
と云ふ事に上ふ云へれど。猶三五本国考の末條ゑ謂ふまも見べし。ちて山海經ゑ右に記せるよりて。若木扶桑を異木に如く聞ゆる故ふ楚辭ふ摠
余轡乎扶桑。折若木以拂日と詠ぜるを始め。對句ふも作れ
る文章どもに多ぞかし。其に彼阮籍ゑ詩ゑ。若木燿四海。
賦ふ扶桑臨于海上。若木照于崑崙と作れるなど是なり。皇扶桑鬻瀛州を云ひ。楊烱ゑ渾天
国の書ゑも扶桑略記ふ崇峻天皇元年。百濟より佛舍利を

献れる時の表文を載せる中ふ伏請陛下照佛日於若木之
鄉掩慈雲於扶桑之邑を。然きに書等ふ東海中ゑ若木
国と云ふ国ありと云ふ說の聞ゆるも疑ふあく扶桑国に訛傳あり。ちて其扶桑神木。何所ふ
在りし哉と云ふこと。後ふに知らぬ成ぬきど。上古ふ扶疏して
在りし間に。彼國の地方より。能く見えゝふふ故ゑ。其古傳は
遺れるなり。其に山海經東山經ふ。流沙三百里至于無臯之
山。南望幼海。東望榑桑と有ふに以ても辨ふ侘し。但し此に直ふ彼国
より見さる耳あらぬ。世に初ふに。扶桑の地より。神眞さち
の。多く往來ひて在りる故ふ。其語り傳へもはゝ遺れるふ
に。其由に三五本国考ふ論ふを見べし。彼國ふに望放れど。天日は直ゑ。其神木
ふに出るごと見えし故ゑ。右の如く傳ゑ。まゝ東杲杳なり。
此字も。此木ふ依ゆて制れるふに。其に說文ふ。杲動也。從木。

官溥說從日在木中を見え。徐鍇が通釈は東方物所甲坼萌動平秩東作故為動也と云へり。前漢歴志は東方東動也易氣動物於時為春と云ひ。說文段注は木榑木也と云へり。黄帝本行記は注ふ。東者動也。日出万物乃動也。東字從日穿木以日出望之如穿扶桑之林木也など有り。韵會は東字の所は鄭氏曰木若木也日所升降在上曰杲在中曰東在下曰杳廣韵春方也なども云へり。はゝ杲字は明也从日在木上と云ひ杳字は冥也从日在木下と有る通釋は按淮南子曰日出于暘谷拂于扶桑是謂晨明故東字日在木中登于扶桑是謂朏明故杲字日在木上詩曰杲杲出日也史記天官書曰日晡則反景上照于桑榆間故杳字日在木下也など云へ除まて知べし。諸字書どもは皆此說を取りて杲字を日出又明白也と註し杳字を冥也深也寛也寂也など注せれど南西北の字は

も木は緣あ除說ある事なし。けて本文は湯谷上有扶桑有黒齒北に有れば扶桑ある域の下は暘谷あり。黒齒まゝ其間あること著明あり是を以て上は引る呂氏春秋は東至榑木之地青丘之鄉黒齒之國と有ると同じ事を淮南子脩務訓は東至黒齒を云ひ主術訓は東至暘谷あゞを云へり。あゝ帝王世紀劉恕が外紀通鑑前編あど其餘はも彼此見えゝり。まゝ嶽瀆名山記は扶桑山在東海中日之所出也と見え大荒東經は大荒之中有山名曰孽搖頵羝上有扶木柱三百里其葉如芥郭璞云柱猶起高也葉似芥葉有谷曰溫源谷と有り。此文中は頵羝は字も孽搖は連称て四字の山名ある文或は孽搖のみ山名はて頵羝は別義はて誤字あるゝ心得ずさし說文は頵頭大也羝牡羊也と有り然れどかの熊耳山牛頭山などは例はて羊は似ゝる義を以て

四字銘の山ゐらむも知らず。左より右へ思ひ定め難れれど。今姑く顔籤れ字をば用ひ来。はゝ上小引さ
係地形訓の高誘注より。榑木、在登保之山ゆ云るを思ふに。榑
桑木は所在を。我が易州申土の一高山は上ゆて。其山の名
を孽搖山ゆも。登保山ゆも。扶桑山とも稱ひ。然て其山は有
る一州を。扶桑國と云ふこゆ著く。から於其樹上より。溫源谷と
名けし。上池も有りしと聞ゆるを。然る老大樹ゆし有れど。
然も有べき事なるが。其所在詳ゐらず。郭璞注に。溫源、即湯谷也。と云るを非な
り。そを右の文。まず孽搖といふ山ありて。其山上より扶木ゆ
海中に在とは。元より別れるこゆ論を俟ず。但し上池を
谷と云はむ事を。いかゞゆ思ふも有ぢゝれど。此国に在り
て。彼国より望める程の大樹ゆれむ。谷とも云べき上池の
有るも。何ら疑はむ。上池とを。立木の空より水は湛へしを謂

ふ語あり。溫源と云るを思へむ。其上池の水は。溫れりしと聞えゆ。上第四條に引さる名山
記は文より。東岳廣桑山、在東海中青帝所都と有係山。それ名
は相似れど。此を既ゆ云る如く淤能碁呂嶋ゆて。東岳を
ゐむ別山なり。是を以て名山記より。扶桑山ゆは別ゆ擧さる。
思ひ混ふ事ならず。五岳をのみ。人多く其名を知れど。海外大五
岳を知れる人あし。実ゆは海外ゆ天皇太帝は植給ひ
し眞五岳にて。彼国内より謂ゆる五岳を。擬五岳あり。其由委
くは太古傳より云へれど。其概
略を。天柱五岳考より云べし。ちて其易州扶桑は神域ゆ。
て皇國ゐる由を。其域より渡りて彼國を開闢し。其民を教
化せし神聖なちの功績を。諸書ゆ參攷ちに係り。悉く我が皇
神さちは事迹ゆ符合しゆ於皇國をおきて。然る神眞の本

州ある國を。南西北の三方を更ゐて。東方ゐも別て有こと
無きを以て是を知れて。こは三五本国考よ。其神聖さち。彼
云ふ事れ。概略を述カタ。を此神よ當り。此を彼神よ當ると
るを見て悟るべし。斯て此神州の上古ゐ在りける趣を。東方
朔が十州記ぞ精くて。此人固モトより仙風道骨の人にて。
太上の眞官なる。谷希子といふ靈仙て伴トモナは主て。凡人れ得エ
到ゐまじ境界をも見メグり。まく其師の語カタリ依古説をも
聞キ集アツめて。十州記を録シルせ依よし。本書ゐ自記せて。然カるゐ後
人れ加筆も往フリ〳〵見えなて。其を擇エラびて取る爲し。次巻よ彩
魏叢書。雲笈七籤。龍威秘書。列仙通紀おどて收さ依本ども
る文を。漢
を。校合して挙さるあり。谷希子を。第四條ゐ引ある。清靈眞
人傳て。東到ニ青丘ニ。遇ニ谷希子ニと有る。皇国
の神人あり。太古傳を見て知る依し。